

京都大学 大学文書館だより

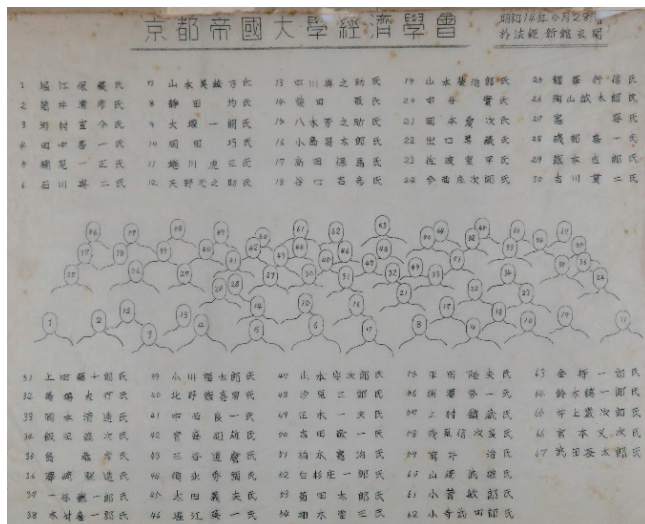
Kyoto University Archives Newsletter

第43号

目次

『京都大学百二十五年史 資料編』の刊行 川口 朋子……………	2
高田保馬関係資料について —没後 50 年に寄せて— 渡辺 恭彦……………	4
日誌……………	6

大学文書館の動き：……………	7
京都大学創立125周年記念事業 大学 文書館記念展示 「京大の周年記念行事 —史料でたどる お祝いの歴史—」を開催しています NHK スペシャル「そして、学徒は戦場へ」 に当館所蔵の資料が使われました	
空襲警報下の入学試験 — 1945 年 1 月、第三高等学校— 西山 伸……………	8



京都帝国大学経済学会の集合写真（1939 年 5 月 28 日於法経新館玄関）

経済学部が法科大学から独立した翌月の 1919 年 7 月、京都帝国大学経済学会が発足し、盛んな研究活動が行われた。1938 年末、近衛文磨内閣が東亜新秩序の声明を発表した。1939 年 10 月、経済学部は東亜経済政策原論講座を設置し、東亜経済の研究と東亜新秩序の建設に資する経済諸政策の樹立に乗り出す。高田保馬が東亜協同体論に触発されて『東亜民族論』（1939 年 6 月）を刊行したのを皮切りに、1940 年には石川興二や谷口吉彦が近衛新体制声明の実現を目指す理論書を公刊した（関連記事 4～5 頁）。写真は、経済学部のスタッフが現実政治へと近づいていった時期のものである。

『京都大学百二十五年史 資料編』の刊行

京都大学百二十五年史編集室 川口 朋子

はじめに

2022年6月18日、京都大学は創立百二十五年周年を迎えた。これに合わせて同日、百二十五年史編集委員会は『京都大学百二十五年史通史編』（A5判、484頁）と『京都大学百二十五年史 資料編』（pdf版、4302頁、以下『資料編』と表記）を刊行した。百二十五年史編集事業は京都大学基金によって実施され、具体的な編集作業は百二十五年史編集委員会に設置された百二十五年史編集室（以下、編集室）が行った。紙媒体の通史編は関係者などへ送付され、今後書店で販売することも検討されている。資料編は電子媒体で刊行され、京都大学学術情報リポジトリ（KURENAI）への登録をもって公開されている（<http://hdl.handle.net/2433/274525>）。小文では京大の沿革史として初めて電子媒体で刊行された『資料編』の内容を簡単に紹介したい。

1. 百年史から百二十五年史へ

1990年代に進められた京都大学百年史編集事業では、1897年の創立から1997年までの100年間における京都大学の基礎データ（法令、規則、学生数、教職員数、年表など）が『京都大学百年史 資料編』（全3巻、紙媒体）に収録さ

れた。当時は学内の公文書や資料を系統的に整理、保存する仕組みは整っておらず、百年史編集事業により体系的に整理された学内資料やデータが初めて公開されることとなった。2000年に大学文書館が設置されると法人文書や寄贈資料を保存、整理、公開、活用する仕組みが整ったが、沿革史編集は所蔵資料を活用する最も大規模な事例と言えるだろう。

百年史刊行以降、京大では基礎データの系統的な収集や整理がなされてこなかったため、百二十五年史編集事業で資料編の製作が決定された。『資料編』は百年史と一部重複する部分はあるが1991年4月1日から2021年5月1日までの30年間を収録範囲とした（データの性質上、例外もある）。その理由は、現在頻繁に実施されている組織再編や制度改正などの大学改革の起点は1991年6月の「大学設置基準の一部を改正する省令（文部省令24）」、いわゆる大学設置基準の大綱化まで遡るためである。

2. 製作の過程

『資料編』の目次は表のとおりである。百年史の構成を踏襲しながらも近年の大学の変化に応じた項目として、「第2部目標・計画・評価等」

表『京都大学百二十五年史 資料編』目次

第1部 法令・規則	6 山極寿一総長	10 外国人研究者受入数
1 法令	7 湊長博総長	11 博士学位授与数
2 規則	第4部 一覧・統計	12 国際交流協定一覧
第2部 目標・計画・評価等	1 沿革図	13 財務状況
1 将来像、長期目標	2 学科・専攻・講座・学科目・研究部門・ユニット・拠点・機構の変遷	14 外部資金受入状況
2 中期目標・中期計画と評価報告書	3 事務局機構の変遷	15 蔵書数及び附属図書館入館者数
3 構想、方針、ポリシー	4 主要人事一覧	16 医学部附属病院病床数及び患者数
第3部 総長式辞	5 建物配置図、施設分布図	17 総合博物館・水族館入館者数
1 西島安則総長	6 教職員数	18 発明・特許・知的財産
2 井村裕夫総長	7 学生数	19 学生生活
3 長尾真総長	8 研究生・日本学術振興会特別研究員・研修員数	20 環境
4 尾池和夫総長	9 留学生数	第5部 年表
5 松本紘総長		

や、「第4部一覧・統計」の外部資金受入状況、発明・特許・知的財産、環境などを新たに設けた。

『資料編』に収録したデータは基本的に学内刊行物や各種報告書、ホームページ等で大学が既に公開しているものである。編集室では目次の各項目について学内の資料状況を悉皆調査したが、それは京大がどのような媒体を使いどのような情報をいつ学内外へ発信してきたのかという30年分の情報発信の変遷をたどる作業でもあった。

収集したデータは京大の歴史的経緯や各種制度の変遷を踏まえて系統的に捉え直す作業を経て『資料編』に収録した。しかし90年代初めと現在ではデータの種類や量、場合によっては統計の基準も異なるため、この作業には特に手間と時間を要することとなった。編集室では30年分の正確な基礎データを提供することを目指し、収集したデータの編集方針や数値の正確性を確認した上で編集し、校正を重ねた。こうして完成した『資料編』は、京大の現在の立ち位置を実証的に調査するために不可欠な基礎データ集とも言えるだろう。

3. 『資料編』から見える学生生活の変遷

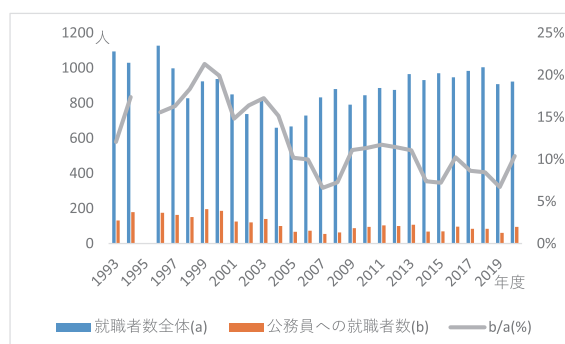
百二十五年史では新たに「学生生活」（第4部）の項目も設けた。個々人で異なる学生生活の全体像を客観的数値で語ることは困難であるが、学生や学生生活の変遷を示すと思われる9種類の公開データを収録した。これらのデータを「年表」（第5部）や『百二十五年史通史編』の記述と照らし合わせ、この30年間の学生生活の変遷の傾向を読み解いてみたい。

まず一般入試で入学する学生の約半数は関西2府4県の高校出身者であり、この30年間で大きな変化は見られない。入学者に占める現役生と浪人生の割合を見ると現役生がゆるやかな増加傾向にあり、浪人を忌避する受験生の増加が推測される。

次に、学生生活を語るには部分的なデータであることは承知しているが、大学公認の課外活動団体の数と名称を収録した。1991年度と2021年度を比較すると団体数にはあまり変化は見られないが、1991年度の文化系団体の名称には「人権」や「差別」、「民衆」、「闘い」など大学や社会に対する学生の問題意識の表

出を感じさせる単語が見受けられる。2021年度にはこれらの単語は見られない。学生相談室（現学生相談センター）に関するデータからは、来談件数が30年間で約2倍に増えており、学生支援に対する需要の高まりをうかがわせる。学部卒業後の進路については、進学者や研修医等を除いた就職者数は90年代後半から減少傾向にあり、大学院重点化による大学院進学率の上昇と関連する可能性が指摘できる。逆に2006年度以降は増加傾向に転じており、近年は学部卒業生の約3割が就職している。就職先の傾向については民間企業の場合、30年間の業種の統計方法が一貫しておらず分析が困難であるが、公務員の場合はバブル崩壊後に一時的に増加しその後減少、近年は就職者の1割程度を占めることがわかる。

図 学部卒業後の就職者数の変遷



※『資料編』には数値のみ収録。図は収録した数値から筆者作成。収録範囲は1991年度から2020年度までだが、1991年度と1992年度は1993年度以降と集計方法が異なるため作図対象外。1995年度のデータは不明。公務員は国家公務員・地方公務員を指す。

いずれも急激な変化ではないが、分析する時間の幅を30年に設定することで学生生活のゆるやかな変遷を読み取ることができるだろう。

おわりに

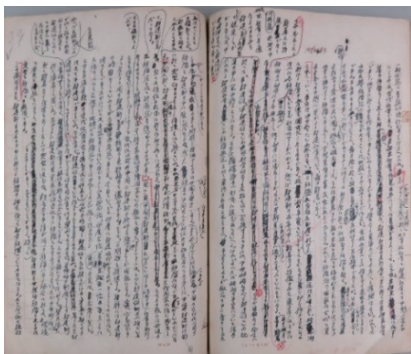
1991年から続いてきた本格的な大学改革の途上で今年、京大は創立百二十五周年を迎えた。『資料編』に収録した基礎データが、京大の自己点検と将来の指針を検討するための材料として活用されれば幸いである。

最後に『資料編』の製作にあたり、事務本部及び各部局の皆様には資料の照会への対応やデータの提供などお忙しい中ご協力いただきました。この場を借りて深く感謝申し上げます。

高田保馬関係資料について—没後 50 年に寄せて—

京都大学大学文書館助教 渡辺 恭彦

今年、高田保馬（1883-1972）の没後 50 年を迎える。高田が生を享けたのは、マルクス（1818-83）の没年である。シュンペーター、ケインズも同年に生まれ、後に学問的にも接近することになった。高田は学生時代からマルクスの学説を深く理解しつつも、批判的立場を貫いた。京大では、河上肇の影響が残る経済学部で講義し、マルキストの学生から向けられた反抗的な質問に対しても、冷静に論理で返答した由である。自筆原稿からも、マルクスをただしりぞけるのではなく、内在的に読み破ろうとしていることが分かる（『マルクス批判』識別番号高田 1-1-14、下写真）。



高田保馬『マルクス批判』（1950、アテネ新書）の原稿。
念入りの推敲の跡があり、「批判」の重みを感じさせる。
写真は、第9章「唯物史観の困難」の箇所。

高田は京都帝大文科大学哲学科で米田庄太郎に師事して社会学を学び、1400 頁に及ぶ大著『社会学原理』（1919）を若くして刊行すると、社会学にとどまらず経済学の畑にも足を踏み入れ、二つの学問を横断する独自の「勢力論」を打ち立てた。広島高等師範学校、東京商科大学、九州帝国大学法文学部等と多くの大学等で教鞭を取り、京都帝国大学では辞職した河上の後を受けて経済原論を講じ、1930 年には専任の教員となった。

当時は、1925 年に治安維持法が施行され、左派にとって苦難の時代であった。1928 年 4 月 18 日に河上が辞職したのは、文部省から左傾教授として名指しされたためで、マルクス主義の立場を取ることが教壇生活を危うくする風潮が強まっていた（『京都大学百二

十五年史』114 - 6 頁）。マルクス主義に批判的な高田が河上辞職後に経済原論を担当したのは、マルクス経済学の転換点としても興味深い事柄である。

高田も 1946 年の教員適格審査で不適格となった。戦時下で書いた「民族と経済」が、全体主義的で時局に迎合する言説であると判定されたからである。浪人を余儀なくされた高田は、故郷の佐賀県小城郡（現小城市）三日月町に戻り晴耕雨読の生活を送ることになる。この間の研究は、三日月に居ながらにして世界に伍するものであった。約 5 年間に在野で研究した後、弟子筋を中心に教職復帰を求める請願書が提出され、高田は 1951 年に大阪大学法経学部で教壇に復帰する。

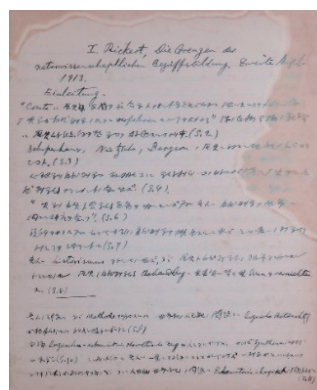
2022 年 3 月、京都大学大学文書館では高田保馬関係資料を公開した。同資料は、高田本人が所有していた自筆原稿ノート類、公職追放の撤回を求める請願書等の資料群である。2019 年に京都在住の御遺族から当館に寄贈された後、当館のスタッフによる整理・目録作成、そしてしかるべき著作権対策を経て 1555 点が公開される運びとなった。原稿 802 点、ノート 172 点に及ぶ自筆原稿類は、100 冊を超える著作、500 篇超の論文を残した高田の筆力を如実に示していよう。多作ぶりについては森嶋通夫らの伝記的エピソードに詳しい。本人も原稿・ノート類が一般公開される日が来るとは想像しなかったのではないか。高田の時代には、文書館は言うに及ばずアーカイブの考えすら日本に根づいていなかったのだから、散逸を免れたのは学术界にとって僥倖というほかない。万年床で書き物に励む在りし日の高田の姿を、御遺族は幼年の記憶にとどめておられた。寄贈に思い至られたことに、あらためて感謝する次第である。

当館だけではなく、小城市立歴史資料館にも、著名な学者や歌人からの書簡類、出征者からの軍事郵便、写真などが収められている。好事家の興味から「佐賀県第一中学校学年成

績表（明治33年4月）」の高田の箇所を目を走らせると、学科科目で満遍なく優秀な成績を修めているなかで、体操に64点とふるわない点が付いているのが微笑ましい。

今年6月に三日月町の高田生家は解体され、高田を研究する吉野浩司氏立ち合いのもと、残されていた資料が小城市立歴史資料館へと移管された。資料の散逸を免れるには、研究者とアーキビストの協働が不可欠であることを示す一場面である。没後50年に当館資料が公開され、生家が解体されることになったのは、数奇なめぐりあわせといえよう。

高田は経済学の京都学派と称されることがあり、本家の京都学派と一脈通ずるところを見出すこともできる。高田は学生であった1912-3年頃、西田幾多郎の授業を聴講しており、西田本人とも浅からぬ縁がある（『高田



保馬自伝「私の追憶」76頁）。1920年前後のノートからも、西田や田辺元によって1910年代に取り入れられた新カント派を高田が綿密に読解していたことが分かる。

「Methodologie der Kulturwissenschaften 雑考〔1920〕」（識別番号高田4-15、上写真）は、リッカー『自然科学的概念構成の限界』（初版1902、6版1929）の原著を読み通して、自分で訳しながらつくったノートである。「Kultur u. Kulturwissenschaften 雑考〔1920〕」（識別番号高田4-16）も、新カント派ヴィンデルバント、リッカー、ラスク、ジンメル原著をまとめたノートであり、Planと書かれた末尾ページでは、新カント派とディルタイの精神科学、西田「意識の内容」、左右田喜一郎「価値の体系」などの再読を自らに課している。別ページには「意識一般ヨリ手ヲ進メル。田辺氏論文ヨリノ収獲」と書かれており、広島で教壇に立ち始めた後も、先端的な哲学論文の精読に勤しんでいたことが窺える。新カント派や京都学派が1920年前後にいかに読まれていたのかを探る格好の研究資料であり、今後時間をかけて精査していきたい。

高田が学問を志したのは、社会にある貧困をなくすという社会主義的な情熱に駆られてのことであった。それゆえ、資質として思弁的でありながらも、高田は貧困問題などの実践にも関心を持った。しかし、師である米田は、高田の蒼い熱意に理解を示しつつも、学問研究においては理論と実践を厳しく峻別すべきで、事実の記述や論理に徹しなければいけないと戒めた。米田の指導に応じた高田は、特殊な問題を実証的に裏付ける方法を身につけることとなった。

哲学書の研究ノートは、思弁の最たるものではあるが、即座に実を結んだようには思われない。目に見える形にはならなかったとはいえ、同時代の潮流をつくった著作を真剣に読み込んでいたことが分かる。ひたすら自身の学問を磨こうとする高田の真骨頂を見たようで、一世紀後の今でも励まされるものがある。三日月村で農作業をしながら研究、著述に打ち込んだ贅力の片鱗がうかがわれよう。

右は建築学者の西山卯三が描いたスケッチで、高田の文化功労者顕彰記念祝賀会（1964年12月27日於京都）アルバムに挟まれていた。雲仙で夕食をとともにした折に（1965年3月24日）、スケッチを描いて高田本人に渡したことが書き残されている（NPO西山文庫所蔵フィールドノート「1965.1-67.8」）。西山は高田『民族耐乏』（1942）も精読していた。一枚のスケッチは、専門や時を超えた交流のしるしといえよう。



保馬の横顔。署名は京大工学部建築学科の教員であった西山卯三のもの。「高田保馬先生文化功労者顕彰記念祝賀会」（識別番号高田6-3）

【参考文献】

- 京都大学百二十五年史編集委員会編『京都大学百二十五年史 通史編』（国立大学法人京都大学、2022）
高田保馬博士追想録刊行会編『高田保馬博士の生涯と学説』（創文社、1981）
高田保馬博士顕彰会『社会学・経済学の巨星、世の先覚者 高田保馬』（高田保馬博士顕彰会、2004）
吉野浩司・牧野邦昭編『高田保馬自伝「私の追憶」』（佐賀新聞社、2022）

[日誌] (2022年4月～2022年9月)

2022 年		6/20	NHK による学徒出陣に関する資料撮影、取材。
4/ 1	事務補佐員酒匂由紀子採用。	6/20	大竹仁子氏より、劇団京大創造座関係資料(追加分) 寄贈。
4/ 6	読売テレビより、なぜ関西の大学では学年のことを「回生」と言うのかについて取材。	6/21	NHK による学徒出陣に関する資料撮影、インタビュー。
4/ 6	西山教授、新採用職員研修において、「京都大学の歴史」「なぜ文書を作る? ー公文書管理法と私たちー」と題して講義。	6/29	大学文書館教員会議。
4/12	笹川日仏財団より、笹川日仏財団フランス事務所の所長だったクレール・ガリアンが1988年に提出した博士論文のマイクロフィルムの所蔵について問い合わせ。	7/ 1	オフィスアシスタント鷲澤遼祐採用。
4/14	学内より、西田幾多郎と縁が深かった臨済宗大本山国泰寺第55代住職雪門禅師の写真の所蔵について問い合わせ。	7/ 1	橋本、全史料協近畿部会第161回例会「電子記録の優雅なライフサイクル: 無料公開のソフトウェアによる実現を考える」(於京都大学楽友会館)において、「アルフレスコ: 現用段階の記録管理」と題して研究発表。
4/16	学外より、60～80年前に曾祖父もしくは高祖父が寄贈した家系図の所蔵が京都大学にないか問い合わせ。	7/ 2	渋沢栄一記念財団、国土館大学、東京大学文書館より、見学のため来館。
4/24	学外より、1919～22年に法学部政治学科に在学していた曾祖父に関する記録について照会。	7/ 7	NHK 大阪放送局より、関西の大学における「回生」という呼び方は京大が発祥かについて問い合わせ。
4/24	橋本助教、日本アーカイブズ学会2022年度大会企画研究会「DX時代のアーカイビング」(オンライン)において、「守るべき記録の特性と進めるべき業務の電子化」と題して研究発表。	7/27	大学文書館教員会議。
4/25	荒木寅三郎関係資料を公開。	8/ 6	渡辺助教、佐賀新聞社主催「高田保馬没後50年記念 自伝「私の追憶」読書会」(於佐賀新聞社)において「第2講 高田保馬の遺産ー京都大学大学文書館「高田保馬関係資料」について」と題して講演。
4/26	学外より、祖父の京大法学部卒業写真に近衛文麿が写っていないか問い合わせ。	8/22	西山、山口県教育庁主催「やまぐちで学ぶ! 高校教育魅力向上事業」ニューフロンティアセミナー(第2回)において「大学は何か? ー近現代日本の歴史からみるー」と題して講義。
4/27	大学文書館教員会議。	8/26	木田いずみ氏より、有賀鐵太郎関係資料(追加分) 寄贈。
4/28	『京都大学大学文書館だより』第42号刊行。	9/ 2	西山、工学研究科技術部横断的研修において「『京都大学百二十五年史』執筆を終えて」と題して講義。
4/28	橋本、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会(全史料協)近畿部会第159回例会「ようこそあまがさきアーカイブズへー新館の見学・公文書管理条例施行・AtoMの試行ーの開催」(於尼崎市立歴史博物館)において、検索システムAtoMについて報告。	9/ 9	学内より、時計台記念館歴史展示室にある折田彦市像の写真の掲載について問い合わせ。
5/25	大学文書館教員会議。	9/14	大学文書館教員会議。
5/25	NHK より、学徒出陣につき取材。	9/20	京都市歴史資料館より、理工科大学創立時の建築図面(京都市歴史資料館所蔵上野伊三郎文書)について問い合わせ。
6/ 2	NHK より、学徒出陣につき取材。	9/23	総合博物館特別展「創造と越境の125年」に所蔵資料貸出。
6/10	学外より、京大における過去の周年式典について問い合わせ。	9/30	橋本、渡辺、第一種衛生管理者試験を受験。
6/13	学外より、『田辺龍城絵図』について問い合わせ。		
6/15	ELP 事務室より、総長官舎の歴史について問い合わせ。		
6/17	橋本、カナダアーキビスト協会2022年度大会(於ブリティッシュコロンビア大学)において、「Hanko, a Traditional Japanese Seal: Examining an Invalid Authentication Tool from an Archival Perspective」と題して研究発表。		

大学文書館の動き

京都大学創立 125 周年記念事業 大学文書館記念展示 「京大の周年記念行事 - 史料でたどるお祝いの歴史 -」を開催しています

2022 年 10 月 5 日から 12 月 4 日まで、百周年時計台記念館歴史展示室において、企画展「京大の周年記念行事 - 史料でたどるお祝いの歴史 -」を開催しています。今年京大は創立 125 周年を迎え、創立記念日の 6 月 18 日を中心に記念式典や記念シンポジウムが開催されました。11 月にも秋の周年記念行事が予定されており、本展示はその一環で開催しています。

周年記念事業は創立時からの歴史を振り返る大切な節目であり、京大ではおおよそ四半世紀に一度開催されてきました。過去の周年記念事業として、創立から間もない頃の 10 周年（1907 年）や 25 周年（1922 年）、敗戦直後の 50 周年（1947 年）、高度経済成長下の 70 周年（1967 年）、バブル崩壊後に迎えた 100 周年（1997 年）があります。各周年記念事業では式典や講演会、祝賀会に加えて、研究教育の発展に向けた新規事業の実施や沿革史編纂、記念建造物の建設など大学の将来を中長期的視点から見据えた全学的な取り組みが進められました。特に記念建造物については 25 周年記念で楽友会館、70 周年記念で総合体育館と京大会館、100 周年記念で百周年時計台記念館が完成しており、大学の活動を支える施設だけでなく同窓生の親睦を深める施設も建設されています。

本展示ではそれぞれの時代に京大がどのように創立をお祝いしてきたのか、大学文書館の資料を使って紹介します。多くの方のご来場をお待ちしております。



創立 50 周年祝典会場の入り口
(農学部グラウンド、1947 年 10 月)

NHK スペシャル「そして、学徒は戦場へ」に当館所蔵の資料が使われました

2022 年 8 月 8 日、NHK スペシャル「そして、学徒は戦場へ」が放映されました。同番組は 1941 年 12 月における高等教育機関の在学・修業年限短縮から 1943 年 10 月の徴集猶予停止（いわゆる学徒出陣）までを取り上げ、当初は学生の動員に抵抗を示していた大学が次第に受け入れていく経緯を、豊富な資料や体験者の証言により明らかにしたものです。当館は、2019 年 10 月以来関連の取材に応じ、さまざまな資料や情報を提供してきました。放映された番組では、当館所蔵の『羽田亨日記』および『梅溪昇関係資料』が使われました。特に『羽田亨日記』は、1943 年 4 月に橋田邦彦文相を罷免して兼任文相として総長会議に出席した東条英機について「独断専行の態度明らかに見え」と記している箇所、同年 10 月に自らの三男が徴兵検査に合格し入隊が事実上決まった際の「現下ノ情勢ニ君国ノ為一塵ノ貢献デモシテ呉レ、バ当人ノ生キ甲斐モアリ我が望ミモ足レリ」と記した箇所が取り上げられ、公私両面にわたる羽田総長の心の動きが紹介されました。また同番組には当館の西山教授も出演しました。

空襲警報下の入学試験 － 1945 年 1 月、第三高等学校 －

京都大学大学文書館教授 西山 伸

1945 年 1 月 23 日、第三高等学校（三高）で入学試験が実施された。1945 年 1 月といえば、戦局の悪化が誰の目にも明らかになりつつある時期で、京都市内でも警戒警報や空襲警報が頻々と発令されており、16 日には馬町一帯に空襲があり死者も出ていた。高等教育機関に目を向けても、すでに多数の文系学徒は陸海軍に入隊しており、この頃には第一線に配属された者もあった。残った学徒も勤労働員のため十分な教育を受ける状況にはなかったうえ、高等学校の修業年限は 1943 年度入学者より 3 年から 2 年に短縮されていた。

そうした状況下によく入試などできたなと思いがちだが、最近の研究では戦争末期でも高等教育機関への進学者・進学率は上昇していたことが明らかにされている（伊藤彰浩『戦時期日本の私立大学』名古屋大学出版会、2021 年）。それどころか、志願校に受験に行くため当時困難だった国鉄の切符入手について、文部・運輸両省の協議によって出身中等学校長発行の受験証明書を持すれば受験者は優先的に切符を購入できるようになる（『朝日新聞』1945 年 1 月 19 日付）など、当局は入試を円滑に行えるよう配慮していた。

表 1945 年度三高入試入学者数等

	文科	理科	計
募集人員	50	360	410
出 願 者	107	760	867
受 験 者	57	569	626
入 学 者	52	332	384

・『第三高等学校第七十六回年報 昭和二十年度』（識別番号：MP50012）より作成。

1945 年度の三高の募集人員、出願者、受験者、入学者は表に示すとおりである（従来文理同数だった入学定員は 1942 年度から理科が多数になっていた）。実は、前年の 1944 年度には 1687 人が出願しており（『第三高等学校第七十五回年報 昭和十九年度』（識別番号：MP50011）、それに比べるとほぼ半減しているが、これは 1945 年度から選抜方法が変わり全高等学校の入試期日が同一となった

ため、高等学校の併願ができなくなったことが大きな理由であった。

出願者に比べ受験者が 241 人も少ないのは、当時の交通事情によるのかもしれないが、ともあれ 626 人が三高で試験に挑んだのである。当日の様子は次のとおりである（『日誌昭和二十年度』識別番号：MP50194）。

一月二十三日 火曜日 晴

午前九時ヨリ入学者選抜学科試験施行

午後一時廿五分警戒警報、全二時空襲警報

発令ニ付試験中止、全四時空襲警報解除、

全十五分警戒警報解除

一月二十四日 水曜日 晴

午前九時ヨリ入学試験（学科試問昨日午後

空襲警報発令ニ付中止シタルモノ）続行、

並体力試験、口頭試問実施

案の定というべきか、23 日午前に始まった学科試験は、午後 2 時に空襲警報が発令されたため中止されたのであった。それでも、翌 24 日には前日中止された学科試験の続きが行われ、体力試験、口頭試問も実施され、何とか 2 日間の日程を終えることができた。

合格発表は 1 月 31 日に行われ、表にあるように 384 人が入学した。結果的に競争率は 2 倍を切っており、例年に比べて受験者数は必ずしも多くはなかった。また、受験者（特に理系の）には、いわゆる徴兵逃れの意図が全くなかったとは言えないだろう。そうだとすると、悪化する一方の戦局下でも高等教育機関への進学希望者は一定程度存在し、教育機関の側もそれに応えていたことは記憶にとどめておいてもよいと思われる。

とはいえ、このときの新入生もすぐに三高で学園生活を送れたわけではなかった。前年 12 月 1 日の閣議決定によって、上級学校に進学する中等学校の卒業生はこの年 6 月まで中等学校在校時の勤労働員先で作業を続けることになり（『朝日新聞』1944 年 12 月 2 日付）、彼らがようやく 7 月に三高に入ると、今度は文科の生徒は京都府寺田村の島津疎開工場へ、理科の生徒は大阪府桜島の住友伸銅所へ勤労働員で派遣されたのであった。